長通の石護さん

平成元年十一月五日号

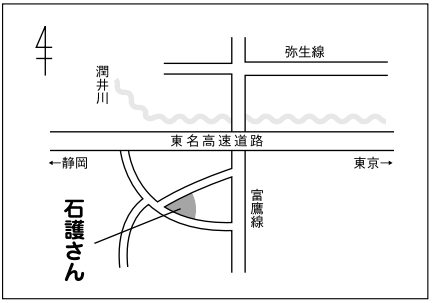
松本の長通に「石護さん」と呼ばれる石碑があります。今回は「石護さん」の話を、長通の時田哲さんと渡辺智さんに伺いました。

「ころり」がはやる

寛政十二年（一八〇〇年）春のことです。長通の一帯に「ころり」と呼ばれた伝染病がはやりました。

当時は現代のような医学もなく、人々はただ恐れをなしているだけで、病人のそばを手ぬぐいで口をふさいでは通っていました。

ですから、亡くなる人が相次ぎました。死亡者の野辺焼きは、今の富鷹線の潤井川橋の近くで行われ、川岸に植えられていた松林のこずえから幾つもの焼煙が立ち上りました。



旅の僧を葬る

そんなある日、長通を通りかかった旅の僧も疫病で行き倒れとなりました。お坊さんは「私を葬ってください。そうすれば疫病から人々を救います」と言って息を引き取りました。

長通、松本の有志は四辻の位置に石塚を立

▲ 石護さん（平成14年１月撮影）

て、手厚く葬りました。そして毎年八月十五日にはお経を上げ、男衆は石護さんを杉の葉で飾り、女衆はだんごなどを供えてかがり火をたき、にぎやかな供養を行いました。

現在では長通の行事となっており、石護さんを信仰すると疫病にかからないと言い伝えられています。

色紙の短冊を分ける

渡辺智さんは「お祭りは昔からずっと続いており、八月十五日に中島の安立寺の住職さんにお経を上げてもらっています。そして経文の書かれた色紙の短冊を長通の全戸に分けています。この短冊を供えると病気にかからないといわれ、農家では田んぼに置いて豊作を祈ったりもしていますよ」と語ってくれました。

語ってくれた方　時田　哲さん
渡辺　智さん